

# 「八浜の戦い」と城

はちはま



両見山城跡（玉野市）を南上空から望む



## 宇喜多氏と毛利氏の激戦の舞台！

「八浜の戦い」は天正10（1582）年2月21日、備前国の宇喜多氏と安芸国の毛利氏が、備前国児島郡の八浜（現在の玉野市八浜町付近）を舞台に衝突した戦いです。当時、宇喜多氏は天正7（1579）年から毛利氏と交戦を続けていて、劣勢に苦しんでいました。

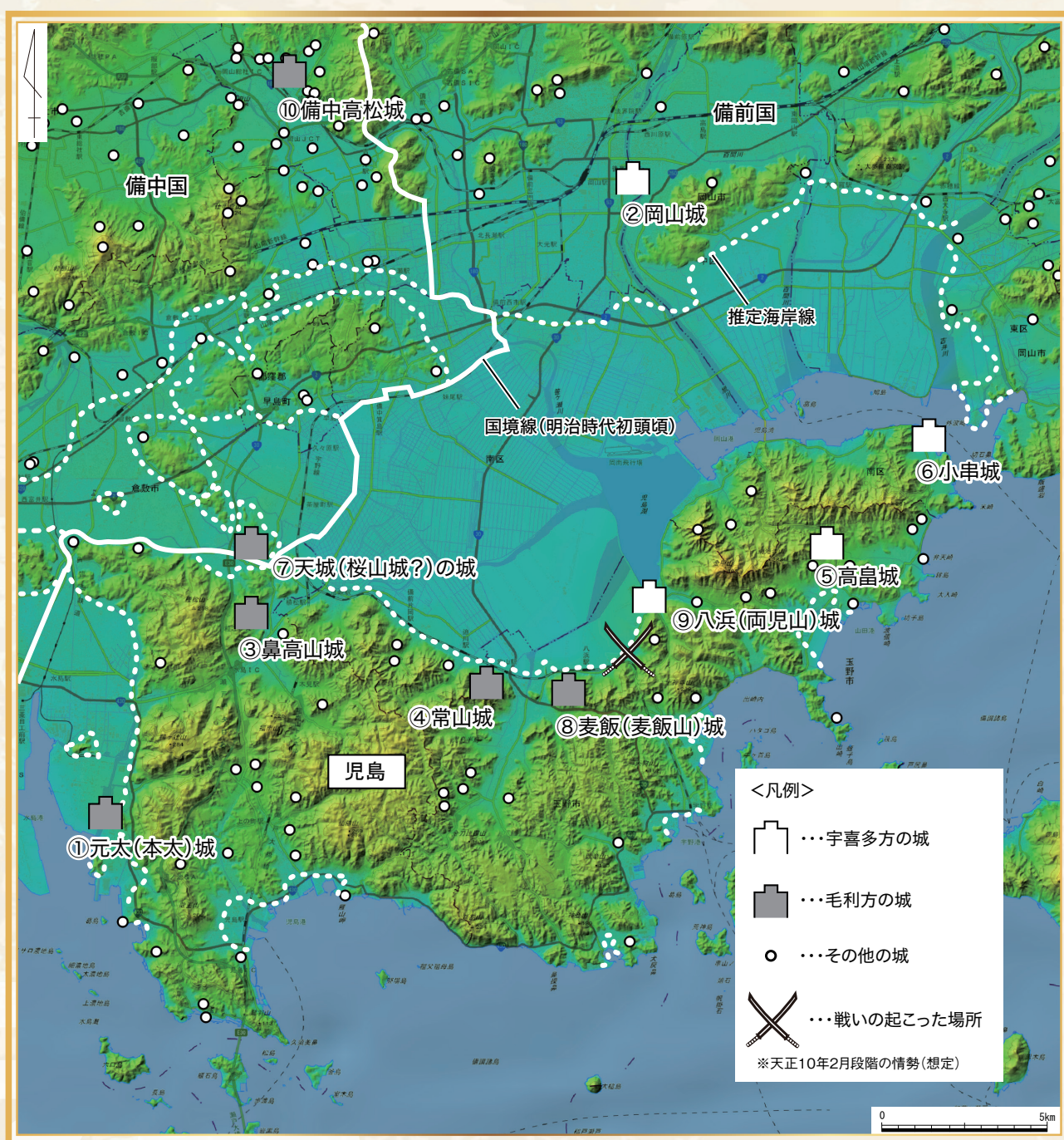
宇喜多氏は天正10年正月頃、児島郡東部の小串城（岡山市南区小串）の城主であった高畠氏を味方に引き入れることに成功します。これを好機とみた宇喜多方の軍勢は2月、児島へ渡海し、毛利方の拠点であった常山城（玉野市宇藤木ほか）の東に位置する、麦飯（麦飯山）城（玉野市八浜町ほか）を目指しました。しかし、そこには毛利氏の一族である穂田元清が先に入城しており、両軍は同月21日に麦飯城と八浜の中間地点にあたる大崎（現在の玉野市八浜町大崎付近）の地で衝突しました。宇喜多方は混戦の

なか、大将の元家（与太郎）が討ち死にするなどして、大敗します。宇喜多方は軍勢をまとめ八浜（両見山）城に籠城し、毛利方は同城を包囲しました。しかし、宇喜多氏と同盟関係にあった織田方の部将、羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）が3月17日に播磨国の姫路城から出陣する動きを見せたため、毛利方は備中国防衛のため撤退します。こうして難を逃れた宇喜多方は4月4日に岡山城で羽柴方を迎えました。その後両軍は備中国へ進出して諸城を攻略し、毛利方の備中高松城を水攻めにするようになるのです。

このように、「八浜の戦い」は「備中高松城の戦い」の前哨戦であったことが、近年の研究で明らかにされています。今回はこの戦いの舞台となった城館群を取り上げ、その特徴を紹介します。

# 児島を巡る戦国時代史

岡山県南部の児島半島は当時、独立した島でした。室町時代には備中国・讃岐国の守護を務めた細川氏の分国となり、その後は備中国の三村氏の一門となっていた上野氏、毛利氏や村上水軍などが勢力を広げます。そして海を渡り侵攻してきた阿波国の三好氏配下の香西氏、備前国の浦上氏、宇喜多氏と抗争を繰り返したのです。その後、天正2（1574）年から翌年にかけて続いた「備中兵乱」を経て、毛利氏が児島を支配することとなり、その拠点である常山城には毛利氏の城番が込められました。しかし、天正7（1579）年に宇喜多氏が織田方に転じると、児島と常山城をめぐる宇喜多氏と毛利氏の争いが続くこととなります。こうした情勢下において両軍の衝突は避けられないものとなりました。



# 児「八浜の戦い」関連年表

年号 (和暦)	年号 (西暦)	児島を巡る出来事	主な出来事
応仁元	1467	播磨国・備前国・美作国の守護赤松政則が松田遠江入道藤英を備前国守護代に任じる	「応仁の乱」が起こる
永正 18	1521	備前国守護代の浦上村宗が、播磨国・備前国・美作国守護の赤松義村を暗殺する	
享祿 4	1531	浦上村宗が播磨国・備前国・美作国守護の赤松政村に摂津国の天王寺で討たれる（「大物崩れ」）	
天文 20	1551	尼子晴久が備前国へ侵攻する	
永祿 6	1563	安芸国の毛利氏と同盟を結ぶ、三村家親と村上武吉が①元太（本太）城を攻略する	
永祿 9	1566		毛利氏が尼子氏を降す
永祿 10	1567	浦上宗景が宇喜多直家に命じて②金光氏の城館（岡山城の前身か）を攻略する	
永祿 11	1568	阿波国の三好氏配下の香西氏が児島郡へ侵攻し、元太城を攻略する	
元亀元	1570	毛利元就が備中国衆と因島村上水軍に命じて③鼻高山城と元太城を攻略する	
		毛利元就が④常山城に兵を入れ、城主の上野高德を支援する	
元亀 2	1571	香西氏、浦上氏、宇喜多氏の連合軍が⑤高鼻城等を攻略し、毛利方はこれに対抗するため常山城に兵を入れる	
元亀 3	1572	この頃、宇喜多直家が本拠を岡山城に移す	
天正 2	1574	三村氏が毛利氏から離反する。毛利氏は三村氏の討伐に乗り出す（「備中兵乱」の開始）	
天正 3	1575	毛利氏が常山城の上野高德を討ち、三村氏は滅亡する（「備中兵乱」の終了）	
天正 7	1579	宇喜多直家が上方の織田信長と結び、毛利氏と敵対する	
天正 10	1582	正月9日、宇喜多直家の死去が明かされ、子の八郎（のちの秀家）が継ぐ	
		正月頃、宇喜多氏が⑥小串城の高鼻氏を調略し、自陣営に引き込む	
		2月14日、毛利方の穂田元清が⑦天城（桜山城？）の城を足がかりに児島へ渡海する	
		2月18日、穂田元清が⑧麦飯（麦飯山）城へ入城し、攻め寄せた宇喜多方との戦端が開かれる	
		2月21日、宇喜多方の軍勢が児島へ渡海し、⑨八浜（両児山）城と麦飯城の間にある大崎で毛利方と戦いに及ぶ（「八浜の戦い」）。宇喜多方は大將の元家（与太郎）が討たれるなど大敗し、八浜城へ籠城する	
		3月4日、宇喜多方の重臣が羽柴秀吉に救援を求める	
		3月17日、羽柴秀吉が姫路城で出陣の陣触れを行う。この時、当初の攻撃目標は常山城であった	
		4月4日、羽柴秀吉が岡山城に入城し、備中国へ進出する	
		4月中旬頃、毛利方が常山城から備中国へ撤退する	
		5月21日、羽柴秀吉が⑩備中高松城を水攻めとする	
			6月2日、「本能寺の変」が起こる
		6月5日、秀吉と毛利方の間で講和が結ばれる	
		6月6日、羽柴、毛利両軍が撤退を開始する	
天正 13	1585	「中国国分」が成立し、児島は宇喜多領となる	
慶長 5	1600	9月10日、宇喜多秀家が常山城在番の川端丹後守から人質を取る	9月15日、「関ヶ原の戦い」が起こる
		関ヶ原の戦いに敗れた宇喜多秀家が改易とされ、備前・美作国は小早川秀秋に与えられる	
慶長 7	1602	7月17日、小早川秀詮（もと秀秋）が常山城を伊岐遠江守に預ける	
		10月、小早川秀詮が死去し、同氏は改易とされる	
慶長 8	1603	姫路城主であった池田輝政の子、忠継が備前国主となる	江戸幕府が開かれる

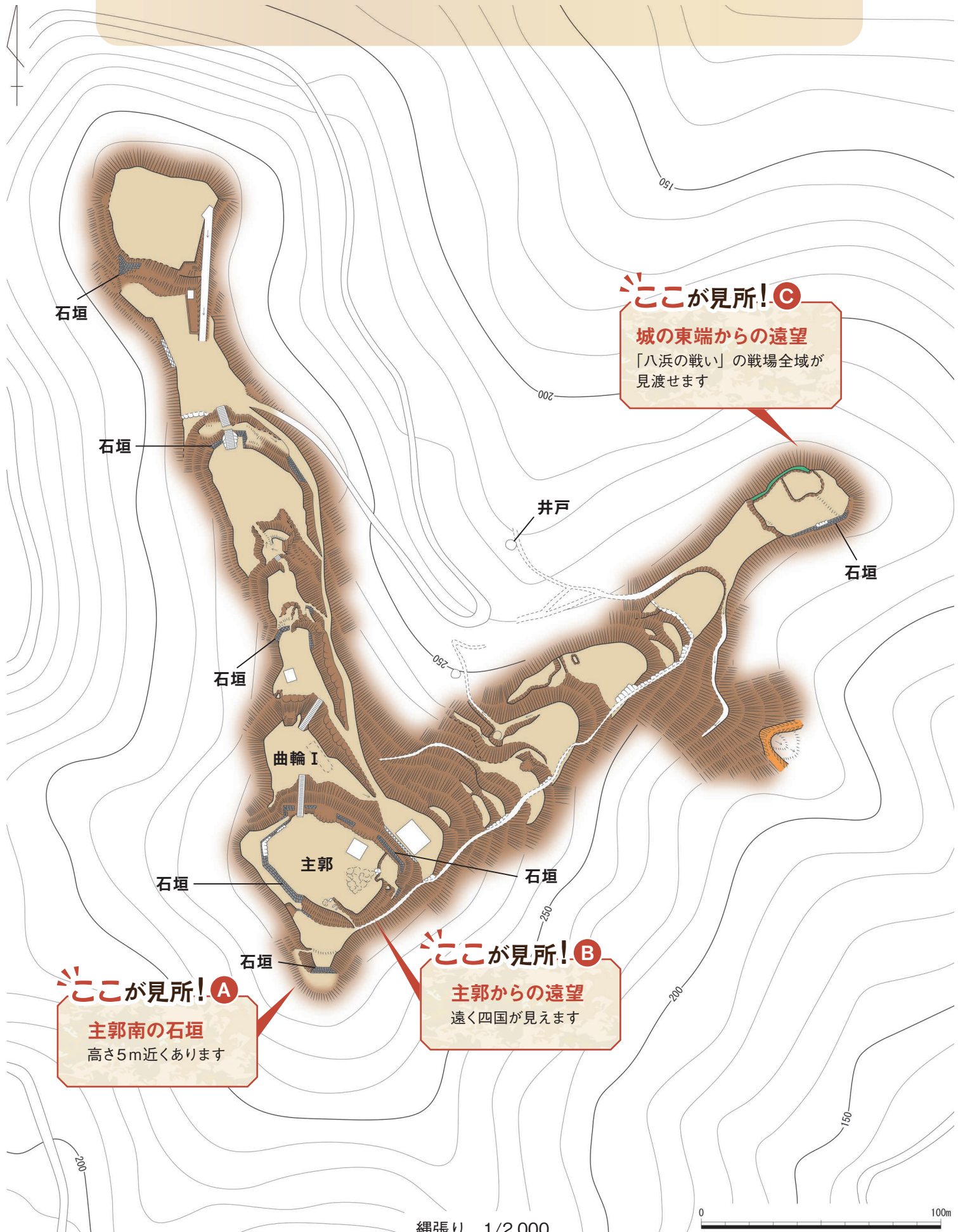
## <参考>

畑和良「文献史料から見た備前国の中世城館」『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第一冊 一備前編一』岡山県教育委員会 2020

森俊弘「年欠三月四日付け羽柴秀吉書状をめぐって―書状と其の関係史料を再読して―」『岡山地方史研究』100 岡山地方史研究会 2003



# 常山城跡の縄張りの特徴



**ここが見所! A**  
**主郭南の石垣**  
 高さ5m近くあります

**ここが見所! B**  
**主郭からの遠望**  
 遠く四国が見えます

**ここが見所! C**  
**城の東端からの遠望**  
 「八浜の戦い」の戦場全域が見渡せます

縄張り 1/2,000



## ④ | 常山城跡

市指定史跡

【玉野市宇藤木・用吉・木目・岡山市南区迫川】

常山城跡は岡山・玉野市境にある常山（標高 307 m）山頂に位置し、全長 380m、比高 300m を測ります。城には城主の上野氏をはじめ、毛利氏、宇喜多氏、こばやかわ小早川氏といった大名の重臣等が代々入城しました。「八浜の戦い」の後、宇喜多氏救援に向かう羽柴秀吉の当初の攻撃目標が常山城であったことから当時、同城が児島における毛利方の拠点であったようです。城は全長 35m を測る曲輪 I をはじめ、大型の曲輪により構成される連郭式山城です。そしてこの城の特徴はこれら大型の曲輪群と、その周囲に築かれた石垣にあります。

城の最高所に全長 50m を超える主郭を配し、その外周には自然石を積み上げた野面積み高さ 2～5 m の石垣が残っています。石垣に用いられる築石は長さ 20～50cm 大のものが主体ですが、主郭周囲のみ 1m を超える築石が部分的に用いられます。こうした大型の築石は立石、あるいは鏡石と呼ばれ、安土桃山～江戸時代初頭にかけての城に見られます。また主郭には多数の瓦が散らばっており、これらは宇喜多氏段階の岡山城の瓦と似た特徴を示します。城の北と東に続く曲輪群の周囲には高さ 3～8m を測る切岸が見られ、部分的に高さ 2m 程度の石垣が残っています。これら散発的な石垣の採用は、江戸時代の城のように総石垣化される以前の特徴を示しており、「八浜の戦い」の後、「備中高松城の戦い」を経て、宇喜多氏の支配下にあった際に石垣普請がなされたと思われます。加えて、主郭をはじめとする大型の曲輪群に瓦葺き建物が建設されるなどして政治拠点化したようです。



遠景



主郭に立つ城主の上野高徳の碑



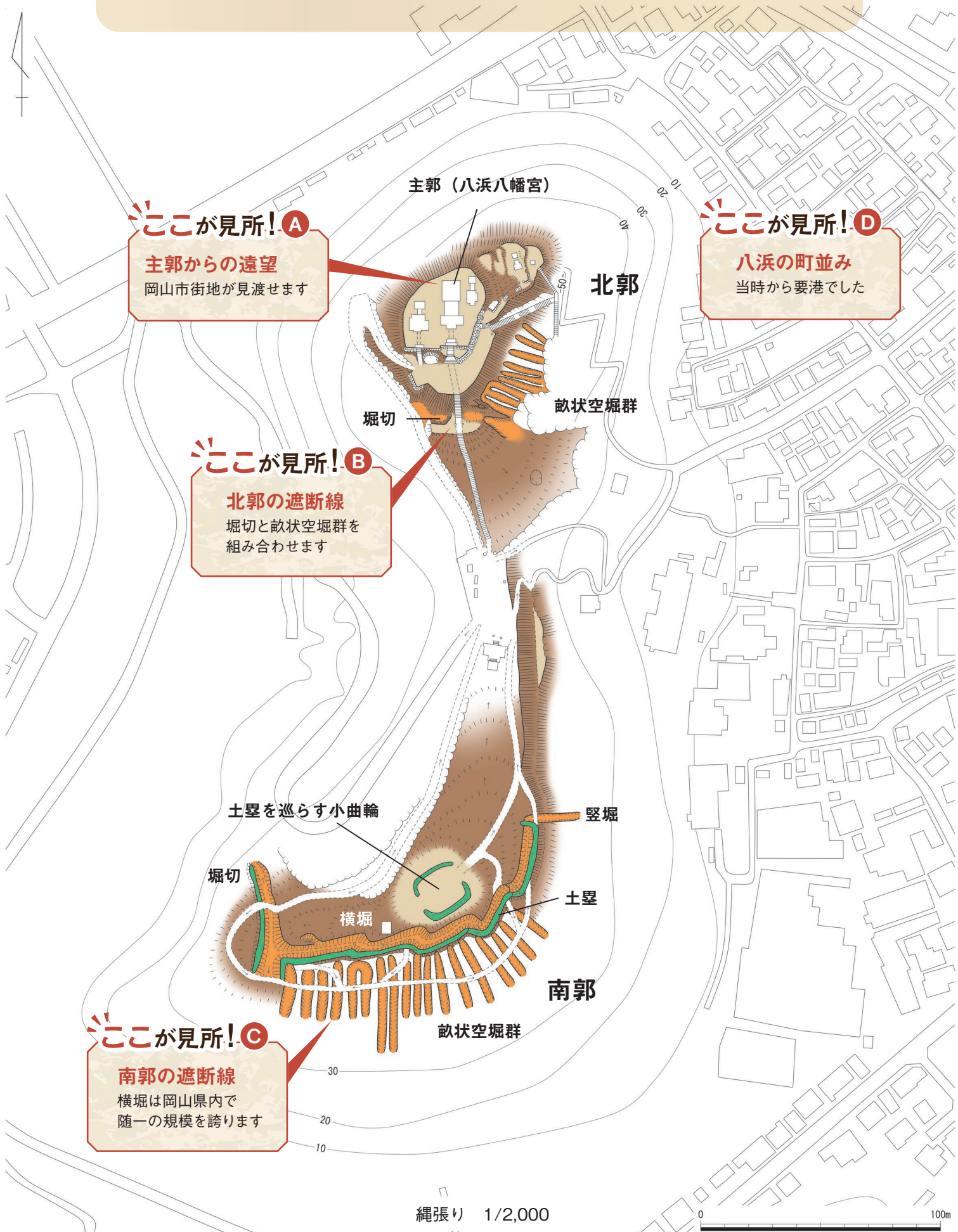
主郭南の石垣



曲輪 I



# 両見山城跡の縄張りの特徴



**ここが見所! A**  
**主郭からの遠望**  
 岡山市街地が見渡せます

**ここが見所! D**  
**八浜の町並み**  
 当時から要港でした

**ここが見所! B**  
**北郭の遮断線**  
 堀切と畝状空堀群を  
 組み合わせます

**ここが見所! C**  
**南郭の遮断線**  
 横堀は岡山県内で  
 随一の規模を誇ります

縄張り 1/2,000

0 100m

## ⑨ | 両見山城跡

### 【玉野市八浜町八浜】

同時代史料には「八浜城」の名で登場しますが、ここでは遺跡名称の両見山城跡として紹介します。この城は天正10（1582）年に再び見島へと渡海した宇喜多方の拠点となり、「八浜の戦い」に敗れた後に籠城した城です。この城の特徴は、嚴重で毛利方に見せつけるように築かれた遮断線にあります。

全長は350m、麓からの比高は60mをそれぞれ測ります。城は北郭と南郭の2つに分かれます。主郭はその規模から見て現在、八浜八幡宮の境内となっている北郭にあったと考えます。この八浜八幡宮には応永34（1427）年銘の棟札（玉野市指定文化財）が伝わっており、戦いの当時、すでに存在していたと思われます。城はこうした宗教施設を再利用したものだだったのです。主郭の東には畝状空堀群を、南には堀切を配して遮断線を築きます。主郭の北東にも数面の曲輪が続きます。

一方、南郭には、その頂上に土塁を外周に巡らす小曲輪があります。この曲輪はその位置から見て戦闘の際の指揮所であったと考えます。そして、小曲輪の南には全長140m、幅5m、深さ1.5～0.5mを測る横堀が掘削されています。そのさらに南側には畝状空堀群、西には堀切、東には土塁と塹堀が配されており、やや過剰防衛にも見えます。これら遮断線は、「八浜の戦い」に敗れた宇喜多方が毛利方の攻撃を防ぐだけでなく、示威をも目的として築かれた「防衛ライン」であったのです。



北郭に立つ八浜八幡宮



南郭の横堀



南郭の堀切



南郭の畝状空堀群

はなたかやま

### ③ | 鼻高山城跡 | 【倉敷市串田】

元亀2（1571）年、毛利氏と香西氏、浦上氏、宇喜多氏連合軍との合戦に際し、毛利方の城として同時代史料に登場します。備中国との渡し口にあたる天城の南に位置することから、橋頭堡となる城であったようです。最高所に全長40mを測る主郭を配し、その北に堀切を、南には豎堀を設けて遮断線を築きます。



遠景

たかばたけ

### ⑤ | 高畠城跡 | 【玉野市上山坂】

「備前記」などの江戸時代の地誌類に、児島の在地氏族である高畠氏の城として登場します。また、同時代史料に「高畠」と見える城がこの城のことを指すものと考えます。城の最高所には土塁を巡らす主郭が配されます。その周囲には高さ8mを測る切岸が見られ、主郭の北側には堀切を配して防御を固めます。



遠景

### ⑧ | 麦飯山城跡 | 【玉野市槌ヶ原・八浜町大崎】

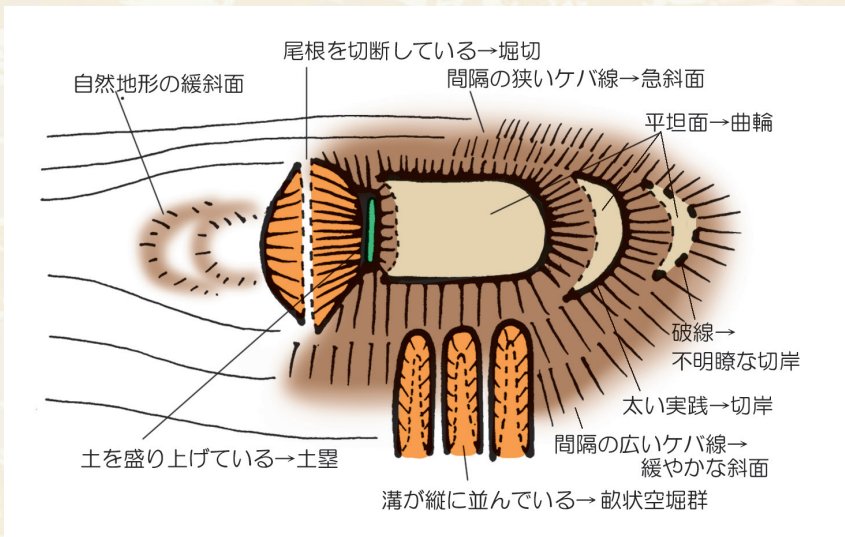
「八浜の戦い」の際に、毛利方の穂田元清が入城した麦飯城にあたります。全長600mを越える巨大な山城ですが、最高所にある2つの峰（麦飯山と雨乞山）にしか、遺構が見られません。城の使われた期間が約2か月程と短期間であることから、指揮所となる峰のみ曲輪を普請し、他の兵は自然の尾根上に駐屯したものと考えます。



遠景

山城の縄張り図では、ケバ線で山の斜面を表現します。

ケバ線の元が斜面の上方で、先が下方になります。ケバ線の向きはその地点の傾斜方向を示し、密度が濃いと急斜面で、薄いと比較的緩やかな斜面です。



#### 【縄張り(なわばり)】

城の基本設計で、曲輪、堀、土塁、出入口（虎口）などの遺構の配置や組み合わせのこと。

#### 【曲輪・郭(くるわ)】

尾根や斜面を造成してつくった平坦地。中心となるものを主郭又は本曲輪（後の本丸）という。このほか、主郭を取り巻く細長い帯曲輪、主郭から下った場所に設けられた腰曲輪がある。

#### 【切岸(きりぎし)】

敵の進入をはばむため、曲輪周囲を人工的に切り崩した急崖。

#### 【堀(ほり)】

城の防衛施設で、尾根を断ち切るように掘られた堀切、山の斜面に沿って掘られた豎堀、豎堀を連続して並べた畝状空堀群、曲輪の周りを取り巻くように掘られた横堀がある。

#### 【土塁(どるい)】

曲輪や堀の縁辺に土を盛ってつくった防御用の高まり。

#### 【出入口(でいりぐち)・虎口(こぐち)】

城や曲輪の出入口。直線的、のぼり坂、屈曲した通路や門の前後の広場を組み合わせたものがある。

【発行日】 令和6年2月

【発行・編集】 岡山県古代吉備文化財センター

〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻 1325-3

電話 086-293-3211 FAX 086-293-0142

<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai>

※ホームページで岡山県中世城館跡総合調査報告書を公開中！



#### ※注意事項

- ・城館跡の多くは個人の所有地です。場所や季節によっては立ち入り制限されているところがあります。見学に際しては、立ち入りに十分注意し、マナーを守って行動しましょう。
- ・見学するときは、野外活動に適した服装を心がけ、十分に注意しましょう。
- ・クマ、イノシシ、マムシ、害のある虫や植物などに気を付けましょう。
- ・自分の位置を確認するため、方位磁石、地図やGPSなどの活用をおすすめします。
- ・城館跡は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。